



# アザメ新聞

## 号外 4

平成16年9月28日発行

(～アザメの瀬中間分析～)

平成16年8月7～8日に兵庫県で開催された“川の自然再生を考えるシンポジウム”（応用生態工学主催）で報告した内容について、お知らせします。

平成13年からの約2年半の取り組みについて、現時点で“効果的であったこと”と“課題になったこと”について説明しました。

### <効果的であったこと>

#### その 身近な目標

“ドジョウ、フナ、ナマズ等、昔よく見かけた生き物の生育・生息する場の再生”と“地域の人々が子どもの頃に経験した生き物との触れ合いを再生”することを目標としました。

#### その 人為で作られた土地（水田）

人為で作られた土地（水田）であり、扱いやすく、規模が小さかったため、再生に向けての計画立案や施工が容易であった。

#### その 国の治水対策で全面買収

国の治水対策で水田の全面買収した土地であるため自由に掘削し形を変えることができた。

#### その 地域の人々の熱意

「シニアパワー」を合い言葉に地域に「アザメの会」を結成し、熱心に楽しみながら取り組まれています。地域の人々は、背伸びをせず、できる範囲で活動しています。

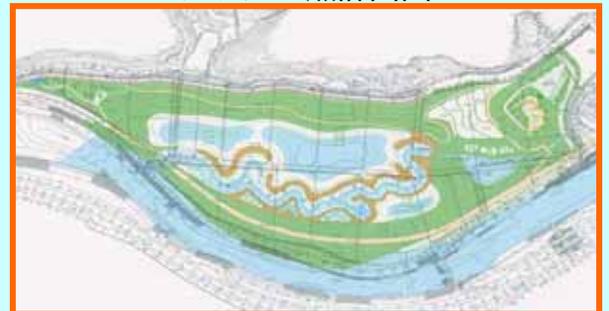
#### その 公募研究と熱心な研究者

行政の調査・研究と公募研究で役割分担し、熱心な研究者から多くの示唆を得ています。

整備前のアザメの瀬



アザメの瀬計画図



公募研究者の方々との意見交換



アザメの会の活動（H16.8.20子供の水遊び）



## < 今後の課題 >

### その 松浦川での位置づけ

松浦川全体としての氾濫原的湿地の再生の考え方について課題を有している。

### その リファレンスの無い氾濫原的湿地

昔と同じような氾濫原にしても河道の条件は違い、周辺の水質や植生の条件も異なっています。目標とする湿地のイメージが、うまく定まっていません。

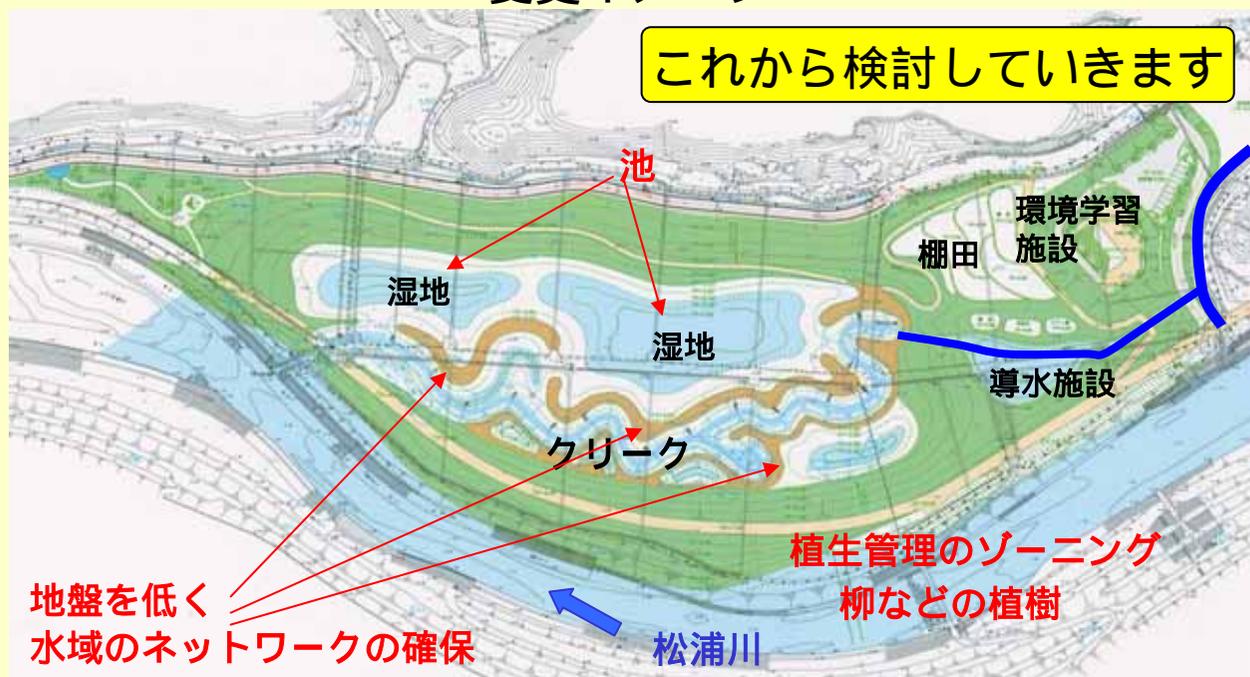
### その 外来種の侵入

セイタカアワダチソウやキシユウスズメノヒエ等、外来種の侵入が急速に進んでいます。発生の源は周辺にあり、予防は困難な状況です。アザメの瀬が、発生の源となる可能性があります。

### その 継続できる体制

自然の変遷は、時間的に長期間を要します。地域の方々や行政はこれに対し、世代交代しながら順応的につきあっていく必要があります。この体制作りをしっかりとっておかないと継続性が危ぶまれます。

## 変更イメージ



### < 今後の検討事項 >

#### 水域のネットワークを中心とした湿地の計画

動植物の生息・生育の場として、湿地（池）と川のエコロジカルネットワークの確保、そういったことを中心とした湿地計画が必要である。

（ エコロジカルネットワーク：湿地と川があり、そこに生物が住むつながりのある環境 ）

#### 基本的な形を作って順応的管理へ

植樹も含め湿地の基本的な形を作って、自然の営力のもとに植物の管理、周辺の環境への対応を検討していきます。

#### 外来種対策

蔓延（草木などが伸び広がる）するまえに早い時期に対策を行う必要があります。

#### 仮説検証型の再生

今後長期的にどのように氾濫原的湿地として存続するか“ 河川の物理的、化学的、生態的なデータや指標から再生の仮説 ” を立て、管理する必要があります。

今後の対応について、検討会を通じて地域みなさんと一緒に考えていきます。